

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 佐野 洋



学位申請者 佐山 豪太

論文名 派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討
ーコーパスが提示する頻度データの言語学的な分析に基づいてー

【審査結果】

佐山豪太氏から提出された博士学位請求論文「派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討ーコーパスが提示する頻度データの言語学的な分析に基づいてー」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は同氏に博士(学術)の学位を授与することが適当であると全員一致で判断した。

最終試験は2018年7月7日(土曜日、14時～16時30分)に、公開で実施された。最初に佐山氏より提出論文の概要説明があり、その後、各審査委員から佐山氏に対して質問、コメント、講評がなされ、最後に主査から総括が行われた。

審査委員会は佐野洋(本学教授)を主査とし、投野由紀夫(本学教授)、匹田剛(本学教授)の他、学外から林田理恵(大阪大学教授)、堤正典(神奈川大学教授)の両先生をお迎えして5名から構成された。

【論文の概要】

本論は、言語学の視点からロシア語の語彙習得水準を、意味理解の方法論も含め、幾つかの客観的な根拠を使って明らかにした研究である。周知のように語彙習得は語学学習に不可欠であって、教育者は、より多くの語彙の習得を指導し、学習者は、豊富な語彙獲得を目指して学習に励む。しかしながら語学学習の常として、決まって議論され、工夫が求められることは、どのような語彙(と意味)をどれだけ学習すればよいか(学習目的に適合するのか)、という語彙習得水準の明示についてである。

本研究で佐山氏は、言語学の観点から効果的で効率的な語彙の習得を実現する基礎資料としての学習語彙セットの考え方の基礎枠組みを提案し、具体的にその成果(テキストカバー率に基づく有効性を示す結果)を示した。この語彙セットには語彙の意味習得順序に対する提案も含む。本手法は、コーパスに基づく客観的な計測手段と、言語類型特徴に基づく言語学的なアプローチによる分析手法、並びに、認知言語学に基礎をおく概念形成の

考え方を用いて提案されたものである。

まず、佐山氏は「ロシア語は特定語数によるテキストカバー率が英語と比べて大幅に低い」ことを指摘する。高頻度語のテキストカバー率の違いを挙げて、例えば、ロシア語の高頻度語（1000語）のテキストカバー率が60.9%であるのに対して、英語のそれは70.8%に達する。2000語でみても3000語で比較しても、差は減少するもののその傾向は変わらない。類型論的視点から見てロシア語と英語は違うし、そもそも「語」という単位はそれぞれの言語で内在的説明によって示されるものである。

この問題点に対して佐山氏は、両者の違いを外在的説明によって示すことを試み、「概念・語彙素」という抽象的な意味の構成素を提案する。概念・語彙素が、（内在的説明で示される）それぞれの言語の語として顕れると考えるのである。英語は（屈折語である西ゲルマン語から分かれたものの、その後名詞の屈折が消失するなど）孤立語としての性質が強いので、構成素（語）の連続という分析的（analytic）方法によって概念・語彙素が表象される。それに対して、ロシア語は（名詞が屈折するとはいえゲルマン語とは違うスラブ語に属し、）構成素（形態素）の派生という統合的（synthetic）方法を用いて概念・語彙素が表象されると考察している。

そうして高頻度語のテキストカバー率の違いを解釈し直し、9200万語規模のコーパスを用いた語の顕れ方の精緻な考察と、語構成論を基礎とした言語学的なアプローチによる検討から、ロシア語の語彙学習・教育に派生接辞を積極的に取り込むことによる効率的な学習・教育法を提案している。

すなわち、ロシア語のような豊かな形態法・造語法を有する言語において語彙力を効率的に増強するためには派生接辞を学習に取り入れることが重要であることを言語学的・数量的に確認し、語彙学習のための派生接辞の記述構築の方向性を検討した、いわばロシア語教育教材や学習・指導法を整備するための基礎的研究と言える。

本論文で取り組んだ研究設問は大きく分けて以下の4点である。

- (a) 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認
- (b) 学習価値の高い派生接辞の選定
- (c) 学習価値の高い意味の選定
- (d) イメージ・スキーマと放射状カテゴリーを用いた記述整備

上述の研究設問に対し、テキストカバー率に対する派生接辞の寄与について言語学的なアプローチで明らかにする。接頭辞や接尾辞などの形態論的な派生に加えて、接辞の使用頻度をコーパスから得て、客観的な根拠をもって学習価値の高い語を選び出した。派生結果としての範疇の考え方に、語彙親密性（word familiarity）を導入して、ロシア語における内在的説明としての語を再定義することで、テキストカバー率を向上させる語彙セットを提案している。

【論文の構成とその概要】

論文の第1章から第4章まではこれらの問題に取り組むために基礎となる情報や概念の整理を行うための章と位置づけられ、自身の研究によってこれらの研究設問に取り組んでいるのは主として第5章から第7章である。

まず第1章で研究の背景と目的を明確にする。語彙学習に時間を多く割くことが難しいという我が国のロシア語教育の現状では、ロシア語の言語的特徴を考慮した効率的な語彙学習・指導法の検討が必要であり、そのためには派生接辞の学習が必要であるとしている。

第2章は、語彙の計量的な研究において不可欠な「1語をどう数えるか」に関して先行研究で提案されてきた単位(トークン、タイプ、レマ、ワード・ファミリー)を紹介し、研究に用いるそれぞれの意味を考察した。

第3章では、本研究で繰り返し利用され、重要な役割を果たすコーパスというものに関する基礎的な情報を紹介した上で、これまでに作成されたロシア語の主なコーパスとそれに基づいて構築された頻度辞書について概観している。

第4章ではそれらのコーパスおよび佐山氏自身が作成した5つの100万語コーパスについて検討し、今回の研究にとってはどのコーパスを用いるのが適切か、議論を展開している。結果として Russian National Corpus の Main Corpus を主として利用するのが適切であるとしている。ちなみに第4章について佐山氏は、今回は5章からはじまる議論に備えるための前提知識や背景を提示するものとして、「本論」に含めていないが、本章は佐山氏自身が作った様々なデータに裏付けられた議論が展開され、単なる前提情報の紹介・整理ではない。いわば「研究を展開するための基礎研究」と言えよう。

続く第5章からは上記の研究設問に対する具体的な議論が展開される。まず第5章では上記研究設問(a)「派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認」に取り組むために、コーパスを利用し高頻度5,000語を対象としてレマ単位の頻度データをワード・ファミリー(WF)単位で数え直し、それにより、特定語数の高頻度語によるテキストカバー率がどのように変化するかを見た。結果として、上位1,000語、2,000語といった特定語数によるテキストカバー率は大幅に上昇することが判明した。このことは、高頻度語の中に派生語が数多く含まれており、派生接辞の知識が語彙力増加に効果的であることを示していると結論づけた。

第6章では、上記研究設問(b)「学習価値の高い派生接辞の選定」に取り組む。派生接辞には高頻度で用いられるものとそうで無いものが実際にはあることをとらえ、派生接辞の学習優先度を検討する根拠となる客観的指標の獲得を目指す。実際に学習者が出会う機会の多い派生接辞を選定するためにコーパスの高頻度5,000語に含まれる全ての生起頻度と実質的生産性を求め、生起頻度と実質的生産性ともに高い派生接辞を明らかにした。これによって得られたリストは具体的にどの派生接辞を優先的に学ぶべきかを検討する際の一つの根拠となるものである。

第7章では、研究設問(c)「学習価値の高い意味の選定」を試みる。ロシア語の派生接辞、とくに動詞接頭辞は多義的な場合が多く、語彙学習・指導法を検討する場合、派生接辞の優先順位だけでなく、その派生接辞の持つ意味どうしにも優先順位を立てる必要がある。そこで本章では、前章の分析で生起頻度・実質的生産性がともに高かった接頭辞 pro-/pro- を分析対象として選び学習価値の高い意味の選定を行った。まず 7.1.では次の9つの意味を提示した：

- 1.THROUGH「何かを通過・貫通する動作」
- 2.PASS「何かの脇・側を通過する動作」
- 3.MISS「何かを逃す・逸する動作」
- 4.DISTANCE「ある距離を通過する動作」
- 5.DURATION「ある時間を通して何かに従事する動作」
- 6.EXTENSION「何かが伸びる動作」
- 7.THOROUGH「何かを徹底的に通しで行う動作」
- 8.EXPEND「何かを消費する・使い尽くす動作」
- 9.HARM「何かに害・損傷を与える動作」

また、7.1.ではこれらを詳細に記述するための手段としてロシア語学や認知言語学において先行研究で導入された「解釈構造」、「意味的・統語的特徴」、「イメージ・スキーマ」といった概念を紹介している。

さらに、続く 7.2.ではこれらの意味一つ一つを、解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマを用いて詳細に記述している。

続く 7.3.ではコーパス内で確認された npo-/pro-付きの派生動詞の意味ごとの生起頻度を計測した。その結果、npo-/pro-の意味ごとの学習優先順位は THOROUGH, THROUGH, DISTANCE が最も高いことがわかった。それに DURATION, EXTENSION が続き、その後 PASS と MISS が、そして最後に EXPEND と HARM がくる。このようにして導き出された意味ごとの頻度に関する情報は派生接辞を学習に導入する際の検討材料になると言える。

本章の最終節 7.4.では、前節までの頻度による優先順位とはまた別の立場から、すなわち、意味相互の関係という視点によってこれらの意味のプロトタイプを中心とする「放射状カテゴリー」の記述整備を記述することを試みた。ここでは意味どうしをその遠近によってクラスターに分類することができる。このような記述整理によって意味どうし関係を示すことで学習上覚えやすくすることが可能であると述べている。

そして第8章では本研究の議論をまとめ、かつ今後の課題を提示している。

【審査の概要と評価】

本研究は、ロシア語の語彙学習法に対して言語学の立場から可能な貢献を模索したもの

である。主として計量的な方法から課題に取り組む 5 章、6 章と、接辞の意味的なあり方に取り組む 7 章では大きく性質を異にしているが、いずれとも、そのまま語彙学習法の提案というよりも、語彙学習法・教育法の構築のための手段・道具を言語学的に検討・提示すること目的とした基礎的研究と言えよう。

本論文に対して審査委員からは、高く評価される点として以下の各点が指摘された：

1. 我が国のロシア語の教育・学習理論研究では、これまで経験的な実践報告などが多く、客観的な研究は少なかった。それに対して厳密な方法論でロシア語教育・学習理論の発展に寄与する研究を行ったことは高く評価できる。
2. これまで英語を中心に発展してきた最先端の理論を、ロシア語というタイプが異なる言語に精密にかつ手堅く応用したことは高く評価すべきで、まさにパイオニアと呼ぶに相応しい。
3. これまで主として英語に関して行われてきた先行研究に対する渉猟はしっかりしている。先行研究をまとめた第 1 章～第 3 章も読み応えがあるものになっており、これ自体に有用性がある。
4. 第 4 章について、本人は本論に含まれないとしているが、本章は単に先行研究をまとめたものではなく、研究のためにどのようなコーパスを利用すべきかを自ら方法論により検討したものであり、これ自体も独自の研究として興味深い。
5. 本研究が苦勞して作成したデータや分析はいずれも貴重なものであり、本人によるものも含め今後の教育・研究に応用する無限の可能性のある有益なもので高く評価されるべきものである。今後、さらに研究を発展させてより充実したものに発展させて欲しい。

その一方で、次の様な問題点の指摘や今後の研究への提言がなされた：

1. 教育への応用を前提として研究が行われているが、現場で実際に利用・応用を試みるにより成されるべき有用度確認が行われていない。今回は言語学の視点からの研究にとどめるという立場はある意味正しいと思われるが、やはり、教育法・学習法への貢献を前提とした研究である以上、有用度確認は必要である。今後の展開を期待する。
2. 概念・語彙素の存在を前提として議論を展開しているが、そもそも概念・語彙素は本当に存在しているのか？また存在したとしても通言語的に普遍の基準として利用することは可能なものなのか？確認する必要がある。
3. ワード・ファミリーを教育に利用することの有効性については議論が分かれる問題であり、レマではなくワード・ファミリーを強く推すための理論武装はより強化する必要がある。またどのレベルの学習者からワード・ファミリーを導入することが

有効かは今後の検討課題である。

4. 他にも学習全体の中で語彙学習をどのように位置づけるのか、語彙学習をそもそもどう捉えているのか、など議論すべき問題は多い。また、積極的に学習に取り込むべき接辞とそうでない接辞は頻度以外の観点からも議論すべきであると思われるし、ジャンルを考慮したリストも必要であり、今後の研究によって具体化しなければいけない課題は多い。
5. 外形的な面で、若干の誤字脱字の他、表現が不用意・不適切と思われる箇所が散見された。論文の主旨を曲げたり、価値を下げるものでは無いものの、これらの不適切な表現によって論理展開の正確さや明解さが少々損なわれている。

審査委員から指摘された以上の各点は、基本的に今後に残された課題を中心とするものであり、いずれも本研究の価値を高く評価した上での建設的な提言あるいは要望である。

また、質疑におけるこれらの指摘や質問に対する佐山氏の応答は適確なものであり、多くの場合、既に課題の所在を自覚していることが見て取れた。さらに、それらの課題解決を含めた今後の研究の展開の可能性や方向性についても具体的で明確なビジョンを持ち、研究をさらに発展させて行く強い意思も感じられた。

以上、本審査委員会は、論文の内容及び最終試験での質疑応答に基づき総合的に検討した結果、佐山豪太氏の学位請求論文「派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討－コーパスが提示する頻度データの言語学的な分析に基づいて－」が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。